

4 水圏生物の魅力を伝える「生き様展示」と水族館らしい「学びのかたち」を追求する



立川 利幸
TATSUKAWA Toshiyuki

公益財団法人下関海洋科学アカデミー（下関市立しものせき水族館 指定管理者）
専務理事 兼 館長

下関市立しものせき水族館「海響館」は、「楽しさの中に学びを提供する」を理念に、生き物本来の営みを伝える「生き様展示」や体験型の学びを実践している。地域と連携した海洋教育や魚食普及活動など、海響館が進める特徴的な取り組みを解説する。

はじめに

下関市立しものせき水族館「海響館」は、2001年4月1日にオープンした水族館で、「海のいのち・海といのち」をメインコンセプトとし、約550種約55,000点の水圏生物を展示しています。関門海峡をテーマにした水槽「関門の海」、世界一の種数を誇るフグ目展示「世界のフグ」、国内では非常に珍しい「イルカ&アシカのプレゼンテーション」、国内最大級のペンギン展示施設「ペンギン村」、国内唯一の展示「シロナガスクジラ全身骨格標本」など、地域の特徴を活かしながら他の水族館との差別化を明確にしています。本州と九州を隔てる関門海峡に面した場所に位置し、その外観はクジラの街でもある下関らしくクジラをイメージした大屋根が特徴で、尾ビレ側を下に巻き込んだような美しくダイナミックな曲線を描いています。この特徴的な建物は、関門海峡を中心としたウォーターフロントエリアのランドマークとして存在しています（写真1）。

楽しさの中に“学び”を！そして、“学び”を楽しさに！

オープンから25年が経過した海響館がこれまで変わらず大切にしているスタンスは、「楽しさの中に学びを提供する」というものです。「楽しさ」「面白さ」「癒し」の提供のみを目的に生き物を扱うのではなく、社会教育施設でもある水族館が担う役割の一つとして「学び」があるべきとの考えです。これは、生き物を収集し展示する水族館の使命とも呼べるものだと思います。但し、「学び」を固いイメージとして捉えるのではなく、「楽しさの中に学びがあり、学びも楽しさとなる」ことを重視し、今でも水族館らしい「学び」の形を追求しているところです。



写真1 下関市立しものせき水族館「海響館」

展示に関わるスタッフには「来館者に『へえ〜』といくつ言ってもらえるかやね」といつも伝えています。まずは魅力ある水槽展示をすることで惹きつけ、そこから解説に目を向けてもらい、知らなかった知識を得ることで思わず「へえ〜」と口にしてしまう、これが目指している理想形です。「学び」としてこれで十分ということではありませんが、まずは少しの知識を得たことも楽しいと感じてもらい、それをきっかけとして興味につながることをとても大切なステップとして捉えています（写真2）。

展示に関わるスタッフには「来館者に『へえ〜』といくつ言ってもらえるかやね」といつも伝えています。まずは魅力ある水槽展示をすることで惹きつけ、そこから解説に目を向けてもらい、知らなかった知識を得ることで思わず「へえ〜」と口にしてしまう、これが目指している理想形です。「学び」としてこれで十分ということではありませんが、まずは少しの知識を得たことも楽しいと感じてもらい、それをきっかけとして興味につながることをとても大切なステップとして捉えています（写真2）。

「生き様展示」という取り組み

展示やイベントの柱として「生き様展示」を掲げ、取り組んでいます。

「生き様展示」とは、須磨海浜水族園の園長も務められた故・吉田啓正氏が提唱された考え方で、海響館の前館長である石橋敏章氏がその考えを発展的に海響館に導入したものです。種やグループ特有の行動や習性など自然の暮らし方を積極的に展示することで、そのためには見せる環境づくりやトレーニング、飼育面での工夫・改善が欠かせません。

展示とイベントそれぞれの「生き様展示」について、ペンギンを例に紹介します。

ペンギン展示施設「ペンギン村」は2つのゾーンで構成しており、屋外展示の「フンボルトペンギン特別保護区」は南米のペルーやチリに生息するフンボ



写真3 フンボルトペンギン特別保護区



写真2 クサフグの集団産卵地をテーマとした展示。クサフグが海岸に身を乗り上げ繁殖するという、命をかけて世代をつなぐ営みを水槽展示と映像で紹介している

ルトペンギンを展示種とし、彼らの繁殖地であるチリのアルガラボにある島の環境を再現しています。土を敷き詰め、本物の植物を植え、自然に近い巣を設置し、プールには打ち寄せる波を造っています。繁殖期になると、オスたちはお気に入りの巣を確保した後に土を掘って巣を整え、展示エリアに生えている草（パンパスグラス）をくちばしでちぎって自分の巣に運びます。そして、ペアであるメスが巣の中で産卵し、無事に孵化した場合はそこで子育てをします。このように環境を整えることで、野生のフンボルトペンギンの営みを水族館でご覧いただけるようにしているのです（写真3、4）。併せて、「ペンギ

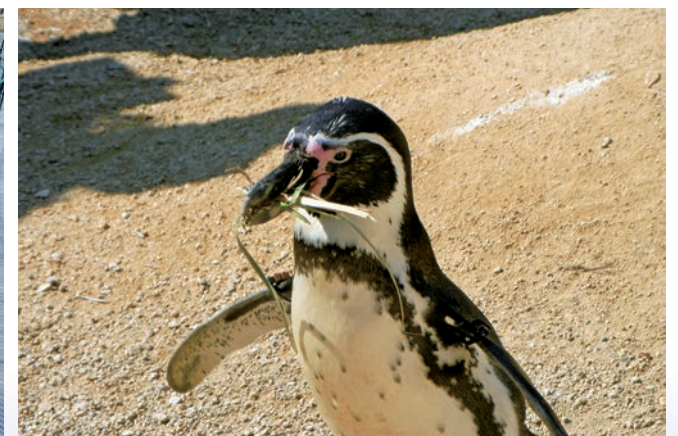


写真4 パンパスグラスを巣に運ぶフンボルトペンギン

ン＝氷の世界にすむ生き物」と多くの方が持たれているイメージを正しい理解へと変容することを狙っています。

もう一つのゾーンは屋内展示の「亜南極のペンギン」で、最大水深6m、水量は約700m³という大きな水槽が特徴です。この施設を造った理由は、多くの方が持つ陸上でよちよちと歩いたり、佇んだりするかわいいペンギンのイメージを変えたいというものでした。ペンギンは水中を泳ぐために体を進化させた鳥類であり、ペンギンが泳ぐ姿を存分に見せることが水族館として本来行うべき展示であるという思いを具現化したものです。施設のオープン後、理想的な展示が実現している中で時々水槽内をペンギンたちが群れになって泳ぐ姿が観察され、野生のペンギンも大きな群れをつくって海上を移動することから「ペンギンの集団遊泳を水槽で見せたい!」ということになりました。そこで、自然に発生する集団遊泳に対してエサを与えることから始め、スタッフが徐々に合図を出していくことで、スタンバイ→スタッフの合図→ペンギンが集団遊泳→エサという条件づけが完成しました。これは強制的なものではなく、ペンギンたちにとっては日常の運動でありながら、「ペンギン大編隊」と名付けたイベントとして来館者にご覧いただいています(写真5)。これも「生き様展示」の一つであり、海響館オリジナルの魅力の一つとなっています。

水族館らしい教育普及活動

地域社会への貢献として行う博学連携の海洋教育プログラム

開館当初から館内外で講座や講義、観察会などさまざまな教育活動を行っていますが、2019年度からは新たな試みとして地域の教育資源を活用した館外における海洋教育プログラムを始めました。最初は下関ゆかりの童謡詩人である金子みすゞさんの詩から海に関係する詩に焦点を当て、そこから海の生き物について理解を深めるという内容のプログラ



写真5 ペンギン大編隊

ムを実施し、次に下関らしくフグをテーマとし、近隣の小学校の授業に組み込んでのプログラムへと展開しました。その流れで近隣の小学校からの提案を受け、2024年度からは小学1年生から6年生までの6年間を通して海に関して学ぶ「わくわくふるさと海峡学」への連携協力を行っています(写真6)。まだ始まったばかりですが、小学校入学から卒業まで継続的に地域の海に関して学ぶこのプログラムは、子供たちにとって海や生き物の学びだけではなく、地域への理解を深め、誇りを持つことにもつながる非常に有意義なものとなっています。下関で始まったこの海洋教育プログラムは全国のモデルケースにもなり得るものではないかと思っており、海響館では水族館が地域社会に貢献できる活動の一つ



写真6 海洋教育プログラム「わくわくふるさと海峡学」



写真7 煮魚教室

と位置付けています。

魚食普及活動

四方を海に囲まれた日本人にとって魚は鑑賞するだけではなく食料として大切に利用しているという側面があり、海響館は魚食の普及活動も行っています。実は水族館で展示している魚などの多くは漁業者からいただいたり購入したりしており、漁業・水産業が成り立っていなければ水族館も存在していくことが難しいという関係性があります。そして、漁業・水産業は海産物を利用する人たちがいなければ成り立ちません。

魚などは栄養として優れているほか、自然のサイクルで生産される持続利用可能な資源として国も消費を推進しており、水産庁は2022年に毎月3～7日を「さかなの日」と制定しました。そして、海響館は水族館として国内第1号となる「さかなの日」の賛同メンバーとなり、魚食普及の活動として水槽のガラス面に魚料理を紹介するパネルを掲示するほか、水槽の中からダイバーが解説するイベントにて魚食に関するクイズなどを行っています。また、オープン初期から実施している一風変わった魚食普及の活動としては、煮付けたタイを食しながら骨を観察する「煮魚教室」を年1回開催しています。非常に人気で、親子で会話しながら骨や魚のことを学ぶ姿がとても印象的な活動です(写真7)。

オープンラボ

下関市には国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産大学校があります。そして開館当初から水



写真8 オープンラボ

産大学校と海響館が共同運営を行う「オープンラボ」を海響館内で開催しています(写真8)。イカの解剖、熱の伝わり方、コンブで和紙づくり、ミクロ生物の観察など、年間20～25の幅広いテーマを水産大学校の先生方がつくられ、海響館1階のスペースでそれを展開します。実験を交えた体験型の学びに子供たちは目を輝かせながら参加してくれています。通常は海響館のスタッフが解説しているのですが、時々水産大学校の先生と学生の方々が来館されて直接解説されるので、普段はあまり機会がないであろう専門家の話を直接聞くことができるのも魅力の一つです。

最後に

私は館長に就任した際、スタッフに向け「良い水族館を目指しましょう」と掲げ、海響館の運営に取り組んでいます。「良い水族館」という表現は漠然としているのですが、人それぞれが持つ水族館像が違うので、敢えてこの表現としました。海響館に来館された方々、周辺地域の方々、観光事業に関わる方々、関係する漁業者、水族館関係者、教育関係者、研究者、そしてもちろん海響館で働くスタッフなど、全ての人に「海響館は良い水族館ですね」と言ってもらえることが、結果として理想的な水族館になることだろうと考えています。その実現まではこれからも長い道のりですが、地道に海響館ファンを増やすように努め、水族館がこの先もずっと必要とされる存在であることを目標として取り組んでいきたいと思っています。そのために、私たちは水族館の魅力を発信し続けていきます。